

鳥取城の通説を疑う

～池田長吉現存遺構構築説を再考する～

細 田 隆 博

1. はじめに

近年、城郭に関わる通説は、既存の城郭遺構そのものが考古学的な調査や研究対象となることで、数多く覆されている。例えば、仙台城（宮城県仙台市）では、その全てを仙台市民の多くが、著名な伊達政宗が築いたと信じていたという。しかし、本丸に現存する城内最大の石垣は、近年に修復工事が行なわれ、調査によって政宗死後に構築されたものであり、政宗が築いた石垣は、その内面に埋設されていることが判明した（仙台市教育委員会 2000）。

このような状況は鳥取城でもあてはまる。俗に、近世城郭としての鳥取城の姿すなわち今日見られるような天球丸や二ノ丸などは、関ヶ原合戦直後に入城した池田長吉が構築したと信じられてきた。しかし、既に天球丸の石垣修復工事では、この説を決定的に覆す調査成果が示されている。ここでは、石垣修復工事によって数々の調査成果を挙げている鳥取城山下ノ丸の中核域すなわち天球丸や二ノ丸に限定して、その成果を整理し、近世城郭鳥取城の一端を明らかにしたい。

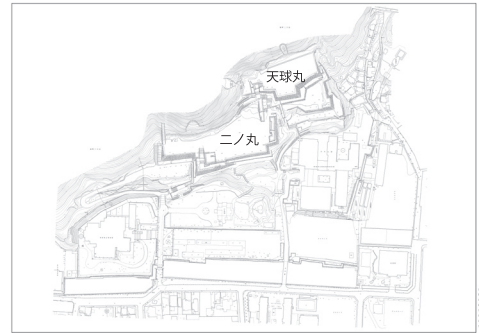


図1 鳥取城山下ノ丸現況図

2. 池田長吉現存遺構構築説の真実

これまでの池田長吉現存遺構構築説の根拠とされるのは、17世紀後半に成立した『因幡民談記』の「鳥取之城普請附喧嘩之事」（徳永 1963）とされる。一次史料でないため慎重に取り扱う必要があるが、記述内容から、確かに長吉は関ヶ原合戦で荒廃した鳥取城をかなりの規模で改修しているようである。しかし、現存する全てを構築したとはどこにも書いていない。総合的に判断して場所が特定できる内容は、本丸天守を三層から二層に改めたこと、東ノ門（後の南ノ御門）を総石垣化したこと、中ノ御門を枡形化したこと、堀を掘って城郭を拡張したことに限られる。

さて、『因幡民談記』の記載内容は、その後、誤って伝えられたようだ。18世紀中頃に成立した『因府録』（鳥取県 1972）では、近世大名制への移行について書かれた箇所、池田長吉の普請について触れられている。これは『因幡民談記』を根拠とした記述と思われる。ここで重要なのは、『因幡民談記』では、山頂の本丸に所在した天守を示す内容が、当時実質的な天守であった二ノ丸三階櫓と誤解をされかねない表記に置き換えられてしまっている点である。従って、この時、二ノ丸の三階櫓は記録上で池田長吉が構築したことになったのかもしれない。その後、この記載内容は、誰もが検証することなく今日まで伝えられている。

かつて、浜崎洋三氏は鳥取城の成立を巡る通説が実証的態度で論じられていないことを「郷土史研究者の重大な過失であったと思う」と述べたが（浜崎 1978）、今回はそれ以上の問題を孕む。そもそも、郷土史研究の基本文献の『因幡民談記』に書かれてもいないことが、現実には流布しているためである。

3. 天球丸石垣保存整備事業の調査成果

では、現存する鳥取城山下ノ丸の中核域、天球丸や二ノ丸は、いつ構築されたのであろうか。実はその答えは既に出ている。平成元年度（1989）から平成8年度（1996）に行なわれた天球丸石垣の解体修復事業に伴う調査は、鳥取城の通説を決定的に覆す成果を上げた。この内容は『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平天球丸保存整備事業報告書』として、鳥取市教育委員会が平成9年3月に刊行している（鳥取市教育委員会 1997）。

ここでは、報告書に書かれた内容を整理したい。報告書内では、調査成果として上層遺構と下層遺構に大別して記述されているが、そのうち下層遺構は、逆凸の字状の現存曲輪が完成した際の遺構と、完成以前の遺構面に区分できる。従って、上層遺構面を第1遺構面として、下層遺構面を第2遺構面、第3遺構面に区分して調査成果を示したい。特に、鳥取城の通説を覆す調査成果である第3遺構面について報告書の内容に依拠して詳述する。第1、第2遺構面については概要に留め、詳細は報告書を参照されたい。なお、16・17頁で掲載した図は前掲の報告書（鳥取市教育委員会 1997）より、作成したものである。

（1）第1遺構面、第2遺構面（図2）

いずれも、天球丸が逆凸の字状の現存曲輪に整備された後に形成された遺構面である。第1遺構面は、享保5年（1720）の石黒大火層より上層で検出された遺構面で、東側からは梁間4間×桁行9～10間の蔵跡が検出されており、主に江戸終末期の遺構面である。第2遺構面では、東側で焼失痕跡をもつ建物跡が検出された。ほぼ全ての礎石が被熱で赤色化していた。石黒大火で焼失した天球丸三階櫓の跡で、梁間4間×桁行12間の規模を測る。石垣の天端石をそのまま礎石としており、第2遺構面は現存の曲輪形が整備されてから享保5年（1720）までの時期と見ることができる。

（2）第3遺構面（図2）

第3遺構面は、現存の天球丸の形状が形成される以前の遺構面である。以下、報告書掲載の遺構名にそって概要を示す。なお、検出された遺構の石材は、鳥取城内で産出し、主体は花崗斑岩である。

①石段遺構（図4）

石垣で構築された曲輪とその比高差を補うための石段で構成される。基底部の標高は46.6mである。石段が取り付く南西面の石垣は、地山掘削面に75度の勾配で築かれる。石面長軸が1mを超える大型石材の平滑面を用いる。他に縦使いの石材も見られるなど、正面性を意識した石垣である。この石垣は、後述する石垣01が継ぎ足された部分で、隅角部を形成する。石垣01を継ぎ足す際に上部は崩されているが、基底部付近には2石の角石が残る。この石垣は後述する石段の高さ程度のものと思われる。石段南東側の石垣は、上述した南西面の石垣に直交する。小振りの石材であるが、平滑面で構成される。

石段の規模は、幅4.3m、奥行き約7.1m、基底部からの高さ4.4mを測る。各段の奥行きは50～60cm、蹴上35cm前後である。段数は遺存部から推定して10～11段と推定される。遺物は、石段の南東石垣の裏栗中から16世紀後半代の中国製の白磁碗（図5-1）、朝鮮半島製の陶器碗（図5-2）、スワトウタイプの青花皿（図5-3）が出土している。

②石垣01（図4）

上述したように、石段遺構のうち曲輪を形成する石垣の北西隅角部に継ぎ足された石垣で、石段遺構が埋設された後に構築されたものである。また、北西端は、現在の天球丸の石垣が構築された際に崩されており、下限は、現状の天球丸が造られた時期に求められる。

規模は、遺存長11.5m、検出高3m、勾配は、70度前後を測る。背面には栗石が認められた。石垣は石段遺構のものと異なり、小型石材で、石垣面が平滑になるような努力が薄く、間詰石が多用されているなど、全体に雑な印象を受ける。

遺物は、石垣01を埋設した土中から17世紀前葉の砂目積み痕跡がある肥前陶器の溝縁皿（図6-1）や皿（図6-2）、底部糸切りの土師皿（図6-3）などが出土している。

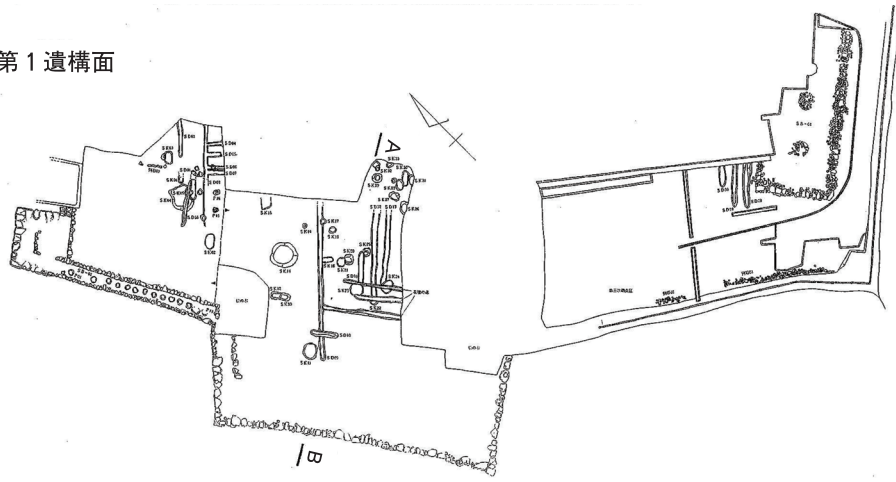
③石垣02（図2・3）

石垣02は、逆凸部のほぼ中央のトレンチ内部で検出された。石垣石は既に無く、背面の栗石のみがトレンチ内で幅1.0m、高さ1.2m前後残る。基底部の標高は46.6mである。石垣02の前後で断層的な層序がみられ、もともと栗石前面にあった石垣石が抜き取られた痕跡が明瞭である。

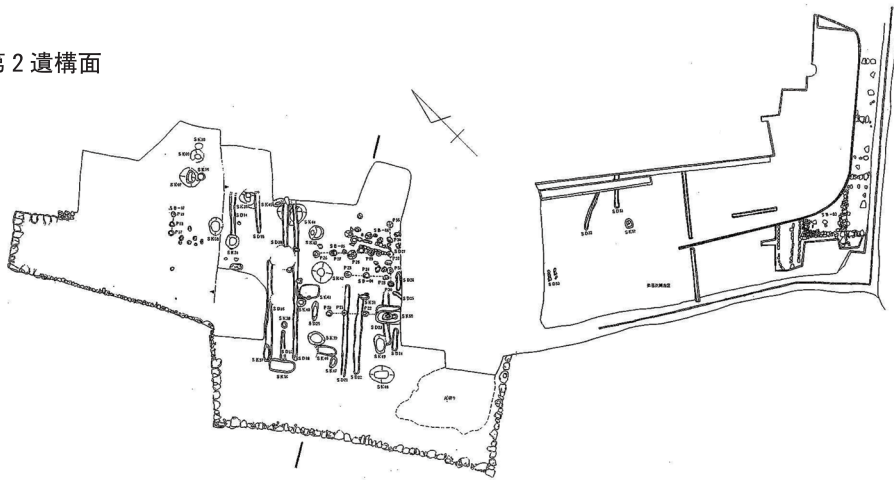
（3）小結

以上をまとめると第3遺構面は、基底部が標高46.6mで共通する石段遺構と石垣02から成る曲輪の時期と、

第1遺構面



第2遺構面



第3遺構面

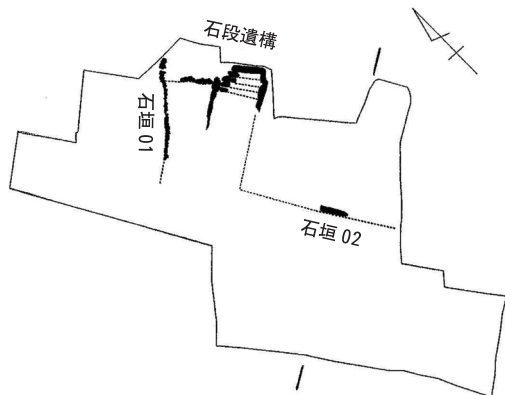


図2 天球丸遺構配置図 (S=1/800)

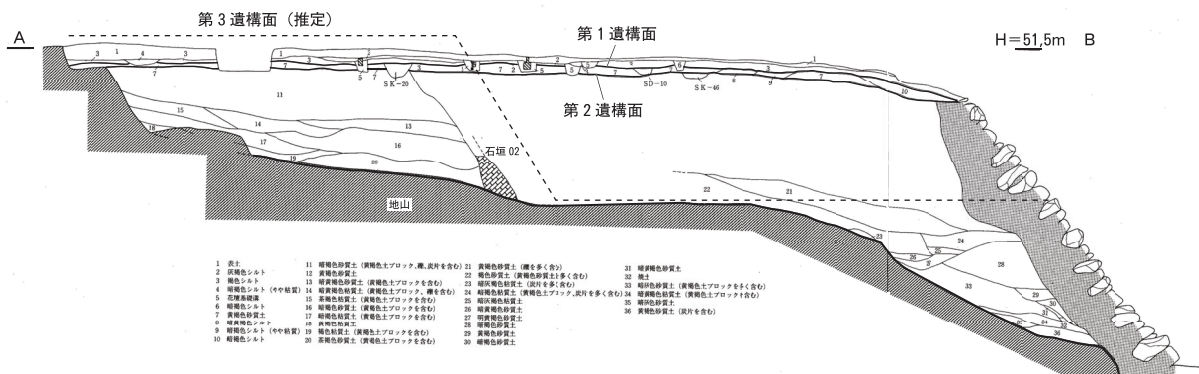
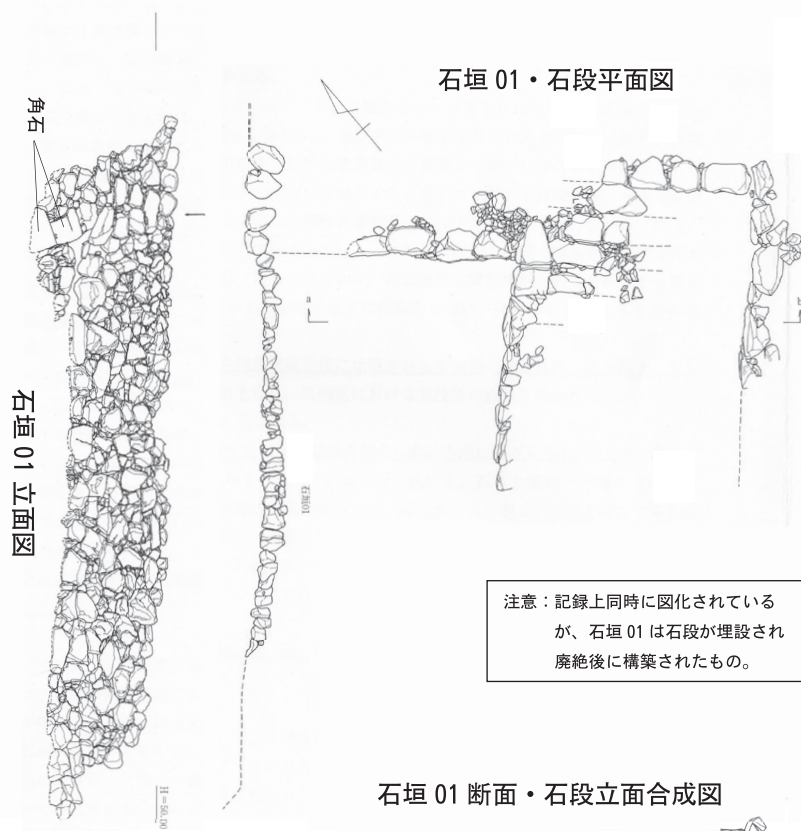


図3 天球丸遺構配置図内A-B断面 (S=1/250)



- 1 暗黄褐色砂質土
- 2 暗黄褐色砂質土（黄褐色砂質土を含む）
- 3 灰褐色砂質土（炭化物を多く含む）
- 4 暗褐色砂質土（灰褐色土、炭化物を多く含む）
- 5 暗黄褐色砂質土（炭化物をわずかに含む）
- 6 暗黄褐色砂質土（炭化物、橙褐色砂質土をわずかに含む）
- 7 灰褐色砂質土（炭化物を多量に含む）
- 8 淡灰褐色砂質土（炭化物をわずかに含む）

石垣 01 断面・石段立面合成図

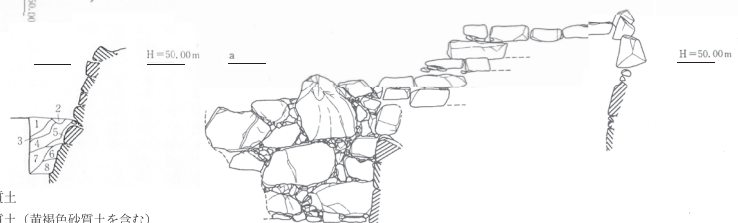


図 4 第 3 遺構面検出
主要遺構図
(S=1/125)

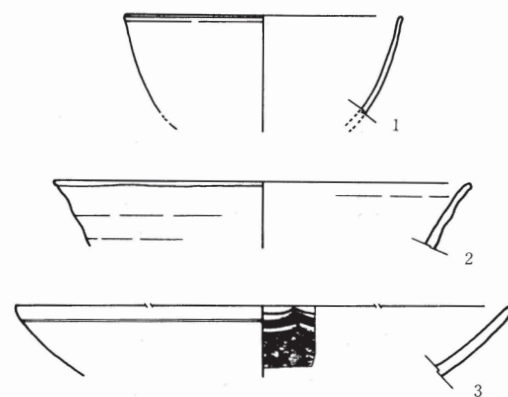


図 5 石段南東石垣出土遺物 (S=1/3)

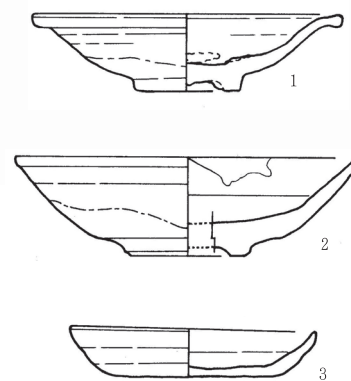


図 6 石垣 01 埋設土出土遺物 (S=1/3)

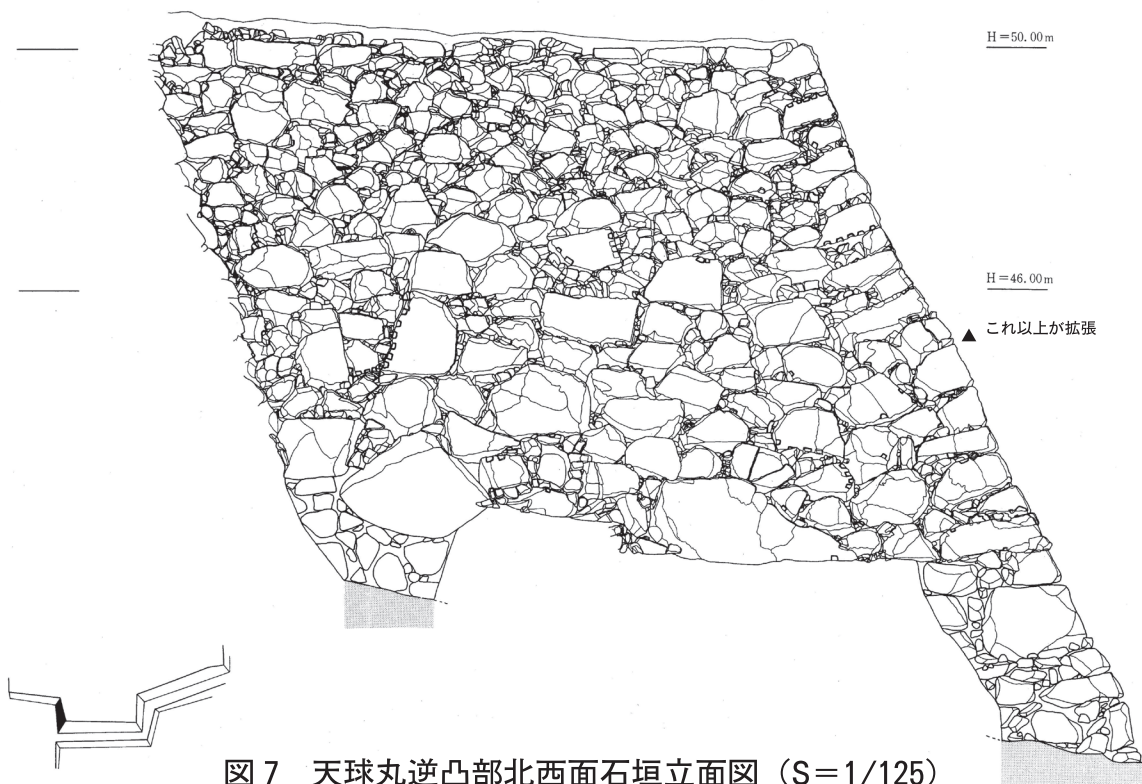


図 7 天球丸逆凸部北西面石垣立面図 (S=1/125)

それが埋設された後に築かれた石垣 01 の時期に細分できる。前者の曲輪は遺存部分から推定して、現状の天球丸と相似形をなすもので、入角部分で、曲輪に昇降する石段が取り付く構造である。石垣 01 は、現存する鳥取城内の石垣の中でも、最も雑な積み方である。実見した当時の調査担当者などの所見は暫定的な石垣であるという認識で一致しており、筆者は現状の天球丸を造成する際に一時的築かれた工程上の石垣と推定している。

また、AB 断面（図 3）を見て欲しい。石垣 02 の基底部の標高付近で、現状の天球丸を構成する石垣背面の栗石の幅が極端に広がる。さらにこの付近を上下して石垣の勾配も変化する。これは石垣の孕み出しではなく、天球丸の逆凸部一体で普遍的に見られる。特に隅角部の状況は、勾配の転換点と軌を一にして一変する（図 7）。これは AB 断面でも裏付けられるが明らかに上下で時期の異なる時期の石垣によって構築されていることを示す。従って、少なくとも天球丸の逆凸部は、石段遺構や石垣 02 で構成された曲輪を最高所にして、標高 46.6m 付近に一段低い曲輪を持った二段構造であったことが明らかである。そしてその一段低い曲輪の石垣をそのまま利用して、同程度の高さの石垣が築かれて、天球丸は一つの曲輪として造成されたのである。

ではその造成時期はいつであろうか。ここで注目すべきは、石垣 01 の埋設土から、砂目積みの肥前陶器皿が出土している点である。大阪では慶長 20 年（1615）の大坂夏の陣以降に主に出土することから、日本海に面した鳥取でもほぼ同時期に出現したと考えられよう。中森祥氏（財団法人鳥取教育文化財団）のご教授によれば、他に出土した遺物からみても関ヶ原合戦直後の様相ではなく、若干時期の下る様相という。石垣 01 の埋設土は、現状の天球丸造成土のことである。ここに池田長吉現存遺構構築説は完全に破綻する。

4. 天球丸から見える近世城郭鳥取城の構造変遷

前述したように、天球丸は、1615 年頃以降に今見られる逆凸の字状に整備されたようだ。その最大の画期は関ヶ原合戦前後から 5・6 万石規模の鳥取城が、32 万石の居城となった頃に求められる。すなわち、元和 3 年（1617）から寛永 9 年（1632）まで 16 年間在城した池田光政が天球丸をはじめ鳥取城山下ノ丸の基本的な姿を整備したと考えられる。このことは、発掘調査に基づく成果以外に指摘することが可能である。

まず、『因幡国鳥取絵図』（岡山大学附属図書館蔵）（図 8）がある。当絵図の上部には、「公方様□□被成御覧候絵図成 元和五年九月六日」とあり、「公方」とは、二代将軍徳川秀忠のことである。この日光政は、二条城に行幸の秀忠の御迎として参内しており、この時見せた絵図と思われ、城下町の内容から普請計画図と考えられるという（鳥取市歴史博物館 2001）。ここには、少なくとも天球丸の入口にあたる風呂屋御門と犬走りの上に逆凸部分が描かれている。現状とは若干を形が異なるが、やはり絵図の内容はあくまで普請計画図と思われ、その後の設計変更で現状のような天球丸の姿が形成されたと考えられる。

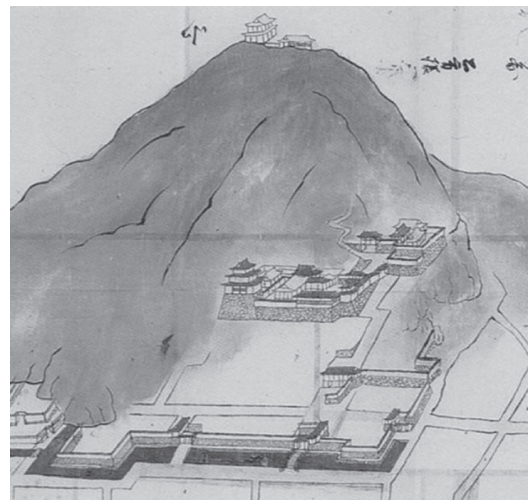


図 8 『因幡国鳥取絵図』（部分拡大）
（岡山大学附属図書館蔵）

また、同じ絵図で二ノ丸三階櫓に注目して欲しい。一切の装飾を廃した斬新なデザインで、一定の通減率で各階が間取りされた描写である。こうした外観の建築様式は、層塔型と言われ、櫓台も、ほぼ正方形であることも特長とされる。実際の二ノ丸三階櫓台も八間四方のほぼ正方形である。層塔型の初現は、建築史学の研究成果から、当代一の築城名手として活躍した藤堂高虎が慶長 13 年に造営した今治城とされる（三浦 2005 ほか）。そもそも二ノ丸三階櫓の創建を池田長吉に求めることは記録上でも成立し得ないことを前述したが、建築史学の分野でも成立し難い。池田光政が 32 万石の居城として、当時最新鋭の建築様式であった層塔型の二ノ丸三階櫓を山陰地方で初めて、創建したのであろう。

また、同じ絵図で二ノ丸三階櫓に注目して欲しい。一切の装飾を廃した斬新なデザインで、一定の通減率で各階が間取りされた描写である。こうした外観の建築様式は、層塔型と言われ、櫓台も、ほぼ正方形であることも特長とされる。実際の二ノ丸三階櫓台も八間四方のほぼ正方形である。層塔型の初現は、建築史学の研究成果から、当代一の築城名手として活躍した藤堂高虎が慶長 13 年に造営した今治城とされる（三浦 2005 ほか）。そもそも二ノ丸三階櫓の創建を池田長吉に求めることは記録上でも成立し得ないことを前述したが、建築史学の分野でも成立し難い。池田光政が 32 万石の居城として、当時最新鋭の建築様式であった層塔型の二ノ丸三階櫓を山陰地方で初めて、創建したのであろう。

さらに、二ノ丸も昭和 55 年の石垣解体修理によって、天球丸と同じように立体的な拡張が確認されている。

現在の二ノ丸下部にある犬走り背後から、古相石垣が発見され、その上部から現在の二ノ丸の石垣が構築されていたのである（鳥取市教育委員会 1987）。

以上のように天球丸も二ノ丸も、池田光政によって現状のような基本的な姿が整備されたと考えられる。両者の特長は、ともに既存の石垣を活用した立体的な拡張ということにある。その背景としては、様々な状況を想定できる。

第一に池田光政が鳥取城の再整備を行なう時期は、既に幕府によって武家諸法度が定められており、縄張りの改変が厳しく戒められていた。そこで、光政は將軍秀忠に会い、前述の絵図でもって直接の許可を求めたのではなかろうか。そして光政は、外郭ラインに所在する既存石垣を利用して、その上に石垣を築くことで、縄張りの外郭ラインを改変しないという武家諸法度の範疇において城の整備を行なったのであろう。天球丸は二段の曲輪を造成して一つに造成されるが、既存の石垣に規制されて古い縄張りを踏襲した平面形となっている。一方、二ノ丸は、前面にある既存石垣ラインはそのままに、久松山の中腹から現在の宝隆院庭園の借景部分まで続いていた尾根を大規模の切り崩し、敷地を矩形に造成している。二ノ丸背後に残る断崖絶壁は、この時のもので当該期の矢穴を見ることができる。

第二には、池田光政は鳥取城を再整備している最中、同時に城下の拡張に伴う外総構の構築や、徳川大坂城の公儀普請に参加している。特に徳川大坂城の公儀普請では、参加した西国北国大名 60 余家の中で、上から 6 番目の規模の石垣普請を担当しており（岡田 1982）、鳥取藩は莫大な出費を行っている。そのため、徹底的なコスト削減の結果、立体的な拡張が採用されたのかもしれない。

さて、次に問題となるのは、池田光政が拡張する以前の鳥取城山下ノ丸中枢域は、いつ構築されたのか、ということであろう。天球丸では逆凸部の石垣の内、北西―南東方向の石垣解体時の盛土断面で、明確な焼土面が検出されている。また、天球丸一段下の楯蔵周辺では、平成 12 年（2000）から平成 15 年（2003）に及ぶ石垣修復工事に伴う調査によって、城内最古相の石垣天端面と同一面で、被熱した建物礎石と焼土面が確認されている（鳥取市教育委員会 2001）。いずれの焼土面も享保 5 年の石黒大火層よりはるか下層で検出され、局所的なものではなく広範囲で確認されている。しかも、石垣を伴った時期の焼土面であることなどから、西軍に与した鳥取城の宮部側が東軍の亀井・赤松軍に攻められた関ヶ原合戦時のものと考えられる。従って、天球丸下段の楯蔵周辺の曲輪は宮部時代の石垣を基本とするものである。実際に、周辺は、帯曲輪が連なる形で古い縄張りを呈している。一方、天球丸に内包された二段の曲輪は、関ヶ原合戦時の焼土上層に構築されていることから、池田長吉期のものと想定できよう。

天球丸は、鳥取城山下ノ丸において最も奥まった位置に所在し、最高所に位置する。東側は巨大な堅堀で守られ、山上ノ丸と最短ルートの中坂と直結する。天球丸は防御上最も重要な箇所である。従って、池田光政が 32 万石の政庁として二ノ丸を整備する以前は、ここが鳥取城山下ノ丸において事実上の本丸であり、城の中心であった。俗に、天球丸は池田長吉の姉・天球院の居所があったため、天球丸と呼ばれるようになったと伝わる。しかし、これもまた根拠が極めて薄い伝承に過ぎない。池田長吉時代に天球丸相当部分に御殿を持つような空間は想定しにくい。池田長吉は、ここに“天守丸”を築いたのではあるまいか。これが、より確かな資料によって鳥取に住んだことが確実な池田光政の伯母・天久院の居所と錯綜して伝えられ、当地が天球丸と命名されたものと考えられる。この経緯の真相は、今後、史学的なアプローチで解明されることを望みたい。

いずれにせよ、現存する鳥取城山下ノ丸の基本的な姿は、池田光政によって整備された。一方、池田長吉の鳥取城は山下ノ丸の中枢域に限れば、二ノ丸や天球丸の内部に内包され、天球丸下の宮部期構築の石垣上部に僅かな痕跡を残すのみである。

5. まとめ

これまで、近世城郭鳥取城の議論は、根拠もなく、関ヶ原合戦以後に池田長吉によって構築されたことを前提に議論されてきた。そこで聞かれた所見には的外れのものも多かった。例えば、隣接する米子城や松江城に比べて、「鳥取城の櫓は低層で破風も無く質素だ。」、あるいは「鳥取城の縄張は防御的に乏しい。」などの所見である。しかし、少なくとも鳥取城山下ノ丸の中枢域は、米子城や松江城のように慶長の築城ラッシュ

期に幕府の具体的な築城規制がない中で完成した城ではない。逆に鳥取城は、大坂夏の陣において豊臣家が滅亡して事実上の平和が訪れた後に武家諸法度など幕府の規制がある中で、現状のように整備された城郭である。従って、築城された時期も背景も異なる城郭同士を同じ指標で論じ、あたかも優劣を付けるような所見は全くの無意味である。城内には、防御性の優れた縄張りは天球丸のように時として埋設され一つの広い敷地として整備された。また、鳥取城内には松江城天守や米子城天守のような高層の櫓はない。二ノ丸三階櫓は32万石にしては、規模が小さいなどと言われるが、これは創建時、既に幕府は高層建築を規制していたためと考えられる。さらに、松江城や米子城の天守が望楼型と呼ばれる古相の建築様式であるのに対し、二ノ丸三階櫓は、当時最新鋭の層塔型の櫓を志向したため、破風などの装飾は一切ない。ちなみに藤堂高虎が層塔型天守として創建した今治城天守（後の丹波亀山城天守）も破風は無い。

既に明らかにしてきたように、鳥取城の山下ノ丸の中核域は、池田光政によって整備されたものである。これによって近世城郭鳥取城は、ようやく全国に所在する近世城郭と比較検討することが可能となるのである。特に、時代背景が異なる中で池田家宗家が現存城郭に大きく関わった姫路城と鳥取城の比較研究は今後行なわれる必要がある。両者を比較検討することで、池田家宗家の築城思想、豊臣家滅亡の前後における幕府の池田家宗家に対する待遇の違い、あるいは、幕府の築城規制の意味などがより具体的に語られるであろう。

参考文献

- 仙台市教育委員会 2000『仙名城本丸の発掘』
- 徳永職男編 1991『因伯文庫稲葉民談記（下）』日本海新聞社
- 鳥取県 1972「因府録」『鳥取県史 6 近世資料』
- 浜崎洋三 1978「鳥取城の成立について」『鳥取市史研究 3 号』鳥取市史編纂室
- 鳥取市教育委員会 1987『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理概要報告書』
- 鳥取市教育委員会 1997『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平天球丸保存整備事業報告書』
- 鳥取市教育委員会 2001『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平楯蔵跡発掘調査報告書』
- 鳥取市歴史博物館 2001『大名池田家のひろがり』
- 三浦正幸 2005『城のつくり方図典』小学館ほか